張博樹著　石井知章・及川淳子・中村達雄訳

新全体主義の思想史
――コロンビア大学現代中国講義

白水社／2019年5月／434頁／4200円＋税

柴田哲雄

張博樹氏について

まず、本書の著者・張博樹氏について紹介することにしよう。張氏は一九五五年に北京で生まれ、一一歳の時にプロレタリア文化大革命の洗礼を受けて「紅小兵」となり、二〇歳の時に国営工場の労働者になった。七七年に全国大学統一試験が復活すると、翌七八年に中国人民大学に入学して経済学を専攻し、卒業後には中国社会科学院大学院で哲学を専攻した。その後、張氏は中国社会科学院に職を得たものの、八九年の六・四天安門事件に遭遇して、人生が一変する。張氏は「生気溌溂とした革命党がいかにして学生を射殺する屠夫に変質するのか」という問題に取り組む決意を固めたのである。こうした問題に取り組んだために、張氏は要注意人物と見なされて、昇進の道を閉ざされてしまった。

張博樹氏は二〇一〇年三月についに中国社会科学院から解雇を申し渡される。その直接的な要因とは、海外メディアに向けてチベットにおける人権弾圧を批判したり、ダライ・ラマ一四世と会見したりしたことである。その後、張氏は警察の監視対象となったが、幸いにも一一年一〇月に米国に移住して、コロンビア大学で教鞭を執ることができるようになり、今日に至っている。本書は副題にあるように、コロンビア大学の講義のテクストである。

九つの思想について

本書は、現代の中国社会に影響力を有する主要な九つの思想について検討したものである。九つの思想の内訳は、以下に掲げる本書の目次にも記載されている。

訳者まえがき（及川淳子）
分裂する中国――日本語版序
はじめに
序章　思想および思想のスペクトルと思潮の衝突
第一章　リベラリズム
第二章　リベラリズム（続一）
第三章　リベラリズム（続二）
第四章　新権威主義

第五章　新左派
第六章　新左派（続）
第七章　毛左派
第八章　毛左派（続）
第九章　中共党内民主派
第十章　「憲政社会主義」の様々な主張
第十一章　儒学治国論
第十二章　紅二代と「新民主主義への回帰」
第十三章　対外的に勢力の強まるネオ・ナショナリズム
第十四章　結論
わが生活の軌跡――著者あとがきに代えて
解題――現代中国における思想的根拠としてのリベラリズム（石井知章）
訳者あとがき（中村達雄）
註
参考文献

九つの思想の内容と張博樹氏の批評について、ごく簡単ではあるが、紹介することにしよう。

リベラリズムは、張博樹氏自身が信奉していることもあって、最も紙幅が割かれて考察されている。リベラリズムとは、西欧流の民主主義を目指すものであり、憲法に依拠して市民の権利を保護し、公権力を監督すべきだという主張である。リベラリズムの論客として言及されているのは、張氏自身以外に、李慎之氏、故平氏、厳家祺氏、範亜峰氏、徐文立氏、封従德氏、周舵氏、王天成氏、李偉東氏である。もっとも一口にリベラリズムと言っても、その目標となる民主政体のあり方や、転換に至る過程のあり方については、論客によって主張を異にしている。

新権威主義とは、西欧流の民主主義に賛成しつつも、暫定的な独裁によって、政治の民主化に先立って、経済の市場化を推進すべきだという主張である。新権威主義の論客として言及されているのは、蕭功秦氏、呉稼祥氏である。張博樹氏は、新権威主義が「全体主義体制の現実に真正面から向き合うことをせず、少なくともそれらを告発する勇気がない」と批判している。

新左派とは、資本主義に批判的な立場をとる欧米の左翼思想の影響を受けて、中国もその一部に取り込まれたグローバル資本主義を批判すべきだという主張である。新左派の論客として言及されているのは、日本でもよく知られている汪暉氏、王紹光氏である。張博樹氏は、新左派が「国家統治の具体的な領域で積極的な創意と主張が不足し、独裁体制をめぐる討論と批判では白紙答案を出している」と批判している。

毛左派とは、毛沢東が晩年に採用したプロレタリア文化大革命の手法によって、権力と資本の癒着などの諸課題の解決を図るべきだという主張である。毛左派の論客として言及されているのは、馬賓氏、張宏良氏、甘陽氏、劉小楓氏である。張博樹氏は、毛左派が「現代中国の政治、社会の暗部に敢然と挑んで為政者を批判している」点では、新左派よりもはるかにましだとしつつも、「ポピュリズムと通底する愚昧性」をはらんでいると批判している。

中共党内民主派とは、かつて党総書記

であった胡耀邦氏や趙紫陽氏になおも追随して、普遍的価値に賛同し、政治改革を主張する党内勢力である。中共党内民主派として言及されている人物は、日本でもよく知られている李鋭氏、謝韜氏、朱厚沢氏である。張博樹氏によると、中共党内民主派は「中国リベラリズムの同盟軍」である。というのは、「中国の民主化という大きな戦略から言えば、体制の内外が互いに力を合わせて転換を推進することが最良の選択だ」からである。

憲政社会主義とは、憲政を肯定している点では共通しながらも、漸進的に政治改革と民主化への転換を推進すべきだというリベラリズムに近い主張もあれば、張博樹氏によると「党＝国家体制の根本に触れる勇気もなく、客観的に見て一党独裁体制の新たな論証を形成している」に過ぎない主張もある。憲政社会主義の論客として言及されているのは、胡星斗氏、王占陽氏、華炳嘯氏である。

儒学治国論とは、中国伝統の儒学に全面的に依拠して制度設計を行い、「王道政治」の実現を目指すべきだという主張である。儒学治国論の論客として言及されているのは、蔣慶氏や秋風氏である。後述するように、蔣慶氏の主張にはリベラリズムの要素が見出されるが、張博樹氏に言わせれば、「儒学治国論には多くの欠陥があり、現実的に全く通用しない」のである。

紅二代が掲げる「新民主主義への回帰」とは、毛沢東が一九四〇年代に唱えた新民主主義に回帰することによって、権力と資本の癒着などの危機を克服し、党の支配の基礎を改めて強固にすべきだとする主張である。紅二代の論客として言及されているのは、張木生氏、劉少奇元国家主席の子息・劉源氏である。張博樹氏はこうした紅二代の主張に対して、誠実な一面や改革的一面を認めつつも、「認識上の巨大な分裂に陥っている」と批判している。

ネオ・ナショナリズムとは、従来の中国ナショナリズムが奇形化・膨張化したものであり、中国がグローバルな秩序を再構築し、米国にとって代わって、新しい世界のリーダーになるべきだという主張である。ネオ・ナショナリズムの論客として言及されているのは、『ＮＯを言える中国』や『不機嫌なる中国』の著者たち、前出の劉源氏、羅援氏、閻学通氏である。張博樹氏は、ネオ・ナショナリズムが「『党＝国家の中興』と『紅色帝国』勃興の民間のシナリオ」でありながらも、習近平政権の「中国の夢」というスローガンと共鳴し合うことにより、「中国政治のゆくえに深く影響している」として、警鐘を鳴らしている。

なお、第十四章の「結論」では、九つの思想の座標軸の変化について考察が試みられている。江沢民政権や胡錦濤政権の前期までは、党の公式イデオロギーを座標軸の中間点に据えると、左側に紅二代による「新民主主義への回帰」、ネオ・ナショナリズム、新左派、毛左派が位置し、右側に新権威主義、中共党内民主派、憲政社会主義、リベラリズムが位置してきた（なお儒学治国論については、こうした座標軸には位置づけられないとしている）。

しかし、党の公式イデオロギーが、胡

錦濤政権の後期から左に移行し始め、習近平政権の登場によって本格化すると、座標軸に大きな変化が起こる。「三左合流」、すなわち「官側の「左」という正統性は、民間における毛沢東左派、新左派と一致して歩調を合わせる」に至ったのである。そしてそれと同時に、当局は「穏健なリベラルな知識界」さえ抑圧するようになり、リベラリズムを全面的に否定するようになったのである。

読後感

最後に、筆者の読後感を記しておきたい。目下のところ日本にとっての喫緊の課題とは、ネオ・ナショナリズムに憑依された中国の脅威とどのように向き合うかということだろう。張博樹氏はリベラリズムこそがネオ・ナショナリズムの解毒剤であるとして、「国民国家の面では、中国のリベラル派は（中略）真実で偽りのない新人類文明観と世界平和についてのカント主義的原則を唱道する」と述べている。中国のリベラリズムは、内政における民主主義と外政における平和主義をセットにしているのである。これより、私たち日本の市民は次のようなことを悟るだろう。憲法九条の理念に則って、軍事力や日米同盟に深く依存することなく、中国の脅威に対処しようとすれば、中国におけるリベラリズムの発展を支援すること以外に有効な方策があり得ないということを。

また、筆者は僭越ながら、張博樹氏に対して一つ注文がある。本書を通じて、張氏がリベラリズムの同盟軍として実質的に評価しているのは、中共党内民主派だけである。しかし筆者が見るところ、儒学治国論も同盟軍になり得る。例えば蔣慶氏は「議会三院」を唱えるが、少なくとも三院の一つである「庶民院」については、「議員は西欧の民主政治における議会の選出規則と過程に従って選出される」と規定しているからである。

張博樹氏は、儒学治国論が今日まで当局から弾圧を被っていない理由として、「過度に空虚で、現実となる可能性が絶対になく、そのため統治者から脅威と見なされることもありえ」ないということを挙げている。確かに「議会三院」のうち、「通儒院」が儒学者、「国体院」が歴代聖賢・君主の末裔によってそれぞれ構成されるべきだという蔣慶氏の主張などは、空虚極まりなく、非現実的である。

しかしながら、リベラリズムが全面的に抑圧されている今日の中国の言論空間においては、儒学治国論の空虚で非現実的な主張でさえ貴重だと言ってよいだろう。張博樹氏は党の「統一戦線」に倣って、小異を捨てて大同につくという態度をとって、儒学治国論をもリベラリズムの同盟軍として扱うべきである。ひいては西欧諸国のキリスト教民主主義に倣った儒学民主主義の確立に向けて、その理論化に取り組むべきであると思われる。今日、儒学はルネサンスを迎え、民間人だけでなく、党の要人にさえ大きな影響力を及ぼしている。中国のリベラリズムは世俗主義の色彩が濃厚であるが、やはり中国社会で多数の支持を得るためには、儒学と折衷することが求められるのではないだろうか。